

## 地域資源を活用したキャリア教育

——ライフキャリアの視点から——

鎌 水 浩

### 1. はじめに

雇用形態の多様化、流動化が進む現在の日本においては、新卒者はいわゆるブラック企業に象徴される企業格差や正規非正規社員格差といった様々な困難な事態に否応なく直面することになる。職業生活に対する不安や嫌悪感が若者に生じかねないこうした状況の中、職業の意義を真正面からとらえ、児童生徒のキャリア発達を健全に促していくキャリア教育は、将来の厳しい職業生活に向けて、さらに重要性が増している。

だがこれまでのキャリア教育の実践またそれに関する研究では、就業や就職の支援が中心の職業キャリアが中心で、社会生活や人生全体を包括するライフキャリアについての視点に欠ける面があった(川崎, 2005)。雇用情勢が増加傾向にあるとはいえ、まだまだ厳しい現在の労働環境には触れずに学校卒業後は働くことが当然であり、卒業するといわば据え膳的に職が用意されているのが前提で、現実の生活感に欠けている面があるのが現在のキャリア教育である。そこで本稿では働くことをより幅広くとらえさせるライフキャリアの一つの視点として「地域資源」を取り上げ、その意義を特に地方の人口減少が加速する日本社会の現状と人間の生物的な進化の面に着目した観点から考察し、さらに中学校における地域資源を活用した実践例を示していく。実践例では活動によって生徒に与えた効果について、自己効力の概念も用いて考察を加えた。

### 2. キャリア教育において地域資源を取り上げる意義

地域資源は物的なものであれ人的なものであれ、地域社会を維持し発展させていく上ではその核心ともなるものだろう。これをキャリア教育に組み込んでいくことは児童生徒のキャリア発達上、本来必須の要素となるはずである。さらに人間が生きていく、またそれを前提に仕事をしていくということにおいて地域や地域資源というのは人間としての根源的な存在となるものなのである。こうした観点からライフキャリアとしてのキャリア教育において地域資源を取り上げる意義を二点にわたり考察していきたい。

まず一点目に挙げられるのは、人口が減少していく今後の日本において地域社会を維持発展させていくには地域資源をますます重視していく必要がある、キャリア教育においてもこのことは十分に考慮されなければならないということである。ただし現在の状況ではキャリア教育の実践において地域と連携していくことは当然ともなっている。実態としては中学校での職場体験学習や高校でのインターンシップは学校の地元地域の事業所が受け入れの中心となっており、その意味で連携せざるを得ないというわけである。だが、この程度の連携ではたまたま地域内に事業所が存在するといった程度のもとなり、多くはその地域ならではの独自の資源を生

かすというところまでは至っていない<sup>1)</sup>。

その中でも独自の資源を生かした実践例及び研究としては小宅・小山田（2016）のものがあ。小宅と小山田は、林業と木工業が産業の中心であり、全国の地方都市村落共通の傾向である人口減少に悩まされている岩手県気仙沼郡住田町の取り組みを取り上げている。住田町ではこうした現状から、地域への誇りを持ち、地元暮らし続けたいと思う児童生徒を養う方針を打ち出しており、具体的には森林環境学習の位置づけとしての林業に接する機会と木工を中心としたものづくりに力を入れている。多くの成果のうちの一つとしては2016年には町立世田米中学校が文部科学省が主宰する「第6回ものづくり日本大賞」の受賞がある。小宅と小山田はこの要因として、この活動が学校教育にとどまらず林業従事者等も巻き込み、地域住民と協働して取り組まれていることを挙げている。

また高淵・三村（2007）は、広島県の過疎化が進む中山間地域にある庄原市立西城小学校での活動を取り上げている。西城小学校では当地での類人猿伝説である「ひばごん」をモチーフにした創作料理「ひばごん丼」を題材にしたキャリア教育活動を推進されており、伝説をも目に見える形で地域資源としてしまうと住民の熱意を感じる活動となっている。

これらの実践を見てみると成果の最大の要因は自治体の人口減少、また少子高齢化に伴う地域社会存続への危機感であるということがいえるだろう。この危機感が地域全体で地域の活性化も含めたキャリア教育に取り組んでいく強力なエネルギーとなっているのである。人口減社会に突入した日本にとっても、これからの針路というのは結局は日本独自の資源を生かしていくしかないであろう。したがって各地域において独自の資源に着目し、それを基に地域の活性化を図る取り組みはその基礎を固めることにつながるといってよい。その取り組みをまずはキャリア教育で行うということなのである。だが現実として、全ての地域社会が現状に危機感を持っているとは言い難い。住田町等の実践例では危機感から地域の独自資源を大きく取り上げ、それを活用していかざるを得ない状況が後押しする形でパイロット的な取り組みとなっている。しかし都市部を中心にした多くの地域において、こうした地域の取り組みが参考とされ地域資源が活用されているかという、至って不十分なのが実情なのである。そこで地域社会存続への漠然とした不安がある程度は存在する程度の「普通」の地域社会において埋もれている資源を発掘し活用していく実践例が重要となってくる。過疎化があるかないか、またあったとしてもその深刻さの軽重を問わず、地域に誇りを持たせ住民とともに地域を存続させていく、というねらいは根本的には共通なはずである。

二点目に挙げられるのは人間にとって地域及び地域資源の存在の根源的な、つまり人類の進化の観点からの意義である。人間が普通の生活を送っている上ではあまりにも当たり前になっていて意識されることはあまりないが、居住したり勤務したりする資源を含めた地域というのは人間にとってはその存在基盤の一部なのである。

現在人間が種として存続できているということは、長い進化の過程で適応的となった固有の本能を持つに至ったからであるはずである。では他の動物に比べて身体的な優位性に欠けていた人間が持つ固有の本能とは何か。何点か挙げることはできるだろうが、基本的には居住する土地への適応とその中の資源を十分に生かすことができる集団化の戦略である。食料を確保しなければ生物は生きることができず、その糧は自分たちの住む土地から得るしかないのである。したがってたとえばその土地には狩猟の対象とすることが可能な動物がどこにどの程度生息しているのか、また食料となり得る植物がどこにどの程度自生しているのかといった知識を

その地形的気候的特色とともに知悉する必要があった<sup>2</sup>。さらにはある場所には一定期間において動物の群れが通過するとか、またある場所では食用の植物が繁殖していたことがあるといった時間的経緯を含んだ要素、つまり歴史も知っておくことが必要であったろう。その結果自分が居住する土地というのは一個の人間にとって極めて大きなウエイトを占める要素となったのである<sup>3</sup>。決して生活できればどのようなところに住もうが頓着しないということではないわけである。

一般に大人が住みたがる居住地は自分が育ち、人格形成に影響を与えられた環境に似ている場所である（ウイルソン，2016）。これは土地、つまり地域に対する我々の人類としての遺伝的バイアスを示すものといえるだろう。そして土地、地域というのはそこにある資源を利用して生活の糧を得てきた場所であることから、現在においても仕事をするということとその場所の地域性とは意識の上で密接な関わりを持つことになる。こうしたことから地域資源というのは、人間が本能として生活を保障する重要なものであるという認識を持つものであり、キャリア教育を実践していく上でも極めて重視しなければならない要素なのである。

この観点を直接キャリア教育の立場として取り上げた実践や研究は見られないものの、地元地域の地理歴史を理解するという「地域学習」は学校教育では幅広く行われており、そしてそのことが児童生徒の郷土意識や道徳性を高めることにつながっているという報告はいくつか見られる。たとえば馬場（2014）は、深刻な過疎化に悩まされている青森県鱒ヶ沢町において小中学校で実践されている「ふるさと学習」を取り上げ、児童生徒数の長期にわたる減少の中で教育委員会を中心にした各小中学校での地元地域の地理歴史及び伝統芸能等の地域文化を継承する継続的な学習が、地元地域への愛着を高め落ち着いた日常生活送る要因の一つになっていることを報告している。この活動内容は実質先の住田町等での実践例と同様といってよい。児童生徒に地元地域についての歴史的地理的、また産業面の内容を理解させることは、結局はキャリア教育の一環としても位置付けられるといえるだろう。

以上のようにこれからの日本のあり方を考える上で、地域社会を維持発展させていく重要な要素として、また人間の進化の結果による本能的な存在として、地域資源は極めて重要なものである。人の一生においては、様々な縁や契機によって職の内容も立場、また居住地も変化していくのが普通であろう。そうした中で社会を幅広くとらえるライフキャリアの視点からのキャリア教育はますます必須なものとなっていくのである。

### 3. 地域資源を生かしたキャリア教育の実践

これまで述べてきたようにキャリア教育において地域資源を取り上げることについては十分な意義がある。だがそれにもかかわらず特に都市部においては、キャリア教育としてのこの活動は皆無に近い。本稿では、こうした中であってその主旨に沿った実践例として、筆者がその企画運営に関わった平成26年度における千葉県白井市南山中学校1学年の活動を紹介する。白井市立南山中学校は、千葉ニュータウンの中に位置し北総線白井駅周辺の開発に合わせ昭和56年に近隣の大口中学校から分離開校した。平成26年度においては全校13学級生徒数346名、1学年は3学級105名の規模である。生徒のほとんどはニュータウン地区に居住しており、白井の歴史や地理、文化といった内容にはあまりなじみがないのが実態である。

## (1) 概要

1年生3クラス各6班、合計18班が白井市を代表する史跡や施設、事業所、また昔の様子を知る個人を訪問取材し、その内容を千葉県内最大の発行部数を誇る<sup>4</sup>株式会社地域新聞社が発行する「ちいき新聞」ニュータウン版に掲載するというものである。新聞社側は記事掲載だけでなく、取材の前後に来校し、取材に関するポイントをレクチャーする事前授業と取材後のプレゼンの評価を行った。取材内容については、取材先を「白井のルーツを探る」「現在までの白井を知る」「これからの白井を考える」の3つのテーマに分類して選択し、白井のこれまでの歩みと現在の姿、そして今後を展望する流れとなるように構成した。取材先は一般的に人口に膾炙している史跡等もあるが、全体的には今回の活動で発掘したといえる箇所が多い。生徒は記者の立場として取材、記事の作成、編集作業を行うことにより地域情報紙制作という仕事を体験する。

## (2) 目的

- ・企業から講師を招きマスコミ関係の専門的な指導を受けることにより、職業への理解を深め、職業人の仕事に対するプロ意識を学ぶ。
- ・白井市の歴史や伝統的な産業について取材し、広く発表することにより、生徒の郷土意識を深め、地域に対する愛着を持たせると同時に、白井の歴史や文化への一般住民の関心を高める。
- ・生徒が取材した記事を「ちいき新聞」紙へ掲載することにより、社会の中で一つの仕事を成し遂げた充実感、達成感を実感させるとともに、広くそれが認知されることにより活動への自信を持たせる。

## (3) 活動の流れ

- 1) オリエンテーション（全体）
  - ・活動の概要の説明
  - ・職業の意義についてのレクチャー
- 2) 地域新聞社レクチャー（全体）
  - ・編集センター次長さんに来校いただき、地域新聞社の概要と取材をする上でのポイントをレクチャーしてもらう。
- 3) 取材先の決定と取材先の下調べ、分担等
  - ・班ごとの取材先が決まったら、図書室資料やインターネットでそこに関する調べ学習を行う。
  - ・取材時の役割分担を決め、シミュレーションを行う。
- 4) 事前指導（全体）
  - ・当日のスケジュール、持ち物等の確認
  - ・緊急時の対応の確認
- 5) 取材当日
  - ・午後から班ごとに取材場所へ出発し、取材を行う。



図1 取材風景

(図1)

- ・持ち物は要項等が綴られたファイル、筆記用具、班長はカメラ
  - ・当日以外に取材実施の班は図書室で自習
  - ・取材から戻った班は教室へ。早く帰ってきた班は教室で自習
- 6) お礼の手紙作成
- ・遅くならないうちに作成し、学校からの礼状と合わせ郵送
- 7) 記事とプレゼン資料作成、ゲラ内容確認
- ・記事原稿作成とプレゼン資料の作成を並行して進める。
  - ・記事が完成したら、その都度地域新聞社へ送付
  - ・地域新聞社からゲラがあがったら、取材先へ照会。修正がある場合は修正稿を地域新聞社に入稿
- 8) 新聞完成 (図2)
- ・記事が掲載された号は、20部余り程度学校へ送付してもらう。
  - ・記事の部分を拡大コピーして学年廊下へ掲示
- 9) プレゼンテーションの実施 (全体)
- ・各取材内容を班ごとに実物投影機を使ってプレゼンを行う。地域新聞社編集センター次長さんに再び来校していただき講評をお願いする。
  - ・プレゼン資料は学年廊下に掲示



図2 「ちいき新聞」に掲載された記事

(4) 取材箇所

「白井のルーツを探る」

No.	組	班	名称	取材対象者	住所
1	A	1	みたらしの池 (市史跡)	市役所文化課	白井市白井
2	A	5	清戸の泉 (市史跡)	市役所文化課	白井市清戸
3	A	3	秋本寺	住職さん	白井市白井
4	A	6	鳥見神社	宮司さん	白井市白井
5	A	2	佛法寺	住職さん	白井市復
6	A	4	八幡神社、熊野神社	しろいふるさとガイドの会	白井市復

「現在までの白井を知る」

No.	組	班	名称	取材対象者	住所
7	B	6	Mさん（梨農家）	本人	白井市復
8	B	5	Mさん（梨農家）	本人	白井市復
9	B	3	やおばあく（JA直売所）	店長さん	白井市木
10	B	2	日本中央競馬会競馬学校	総務部	白井市根
11	B	4	Iさん（延命寺住職）	本人	白井市平塚
12	B	1	Yさん（農家）	本人	白井市復

「これからの白井を考える」

No.	組	班	名称	取材対象者	住所
13	C	3	伊澤白井市長	市長	白井市復
14	C	5	社会福祉協議会	ボランティアセンター	白井市復
15	C	2	白井駅前交番	印西警察署地域課	白井市堀米
16	C	4	UR都市機構首都圏ニュータウン本部	千葉業務部業務推進チーム	印西市中央南
17	C	1	白井駅	駅勤務担当者	白井市復
18	C	6	市役所環境課	市役所環境課	白井市復

## (5) 考察

この活動を通して生徒たちは、多くが地元地域への関心と理解を深めることにより充実した取り組みをすることができ<sup>5</sup>、またこの活動を通して力を伸ばすことができたと感じることができた<sup>6</sup>。実際、筆者が生徒たちを指導している際にも、グループごとに他のメンバー協力しながら真剣に取り組んでいる様子が多く見て取れた。

こうした様子も含め、この活動の成果として挙げられるのは、次の3点である。

第一に生徒に Bandura (1977) の唱える自己効力の向上が期待できるということである。自己効力は、ある具体的な状況において適切な行動を成し遂げられるという予期、および確信であり、ある行動がどのような結果を生み出すのかという結果予期と、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのか、という効力予期に区分されるが、この活動によって双方ともある程度の成果があったと思われる<sup>7</sup>。自己効力については自己効力の高い者の方が低い者よりも、労働への意欲や健康への努力等様々な面で前向きな姿勢を持っていることが報告されている（バンデューラ, 1997）。Bandura (1982) によれば、強力な効力感を作り出すには制御体験がもっとも効果的である。制御体験とは、つまりある行動が成功することである。自分の活動が地域の人々に認められるということは十分に成功体験となるものであろう。この活動では自分たちが取材した記事が、「地域新聞」という誰もが知っている地域メディアに掲載された、ということがそれに当たる。実際、掲載されたことに限らず、この活動を行っていく中で生徒の生活面、学習面とも良い効果があらわれていたとの実感がある。

第二に、生徒自身またひいては地域住民も、地域の様子を過去から現在、そして未来への流れの中で理解することができる、ということである。仕事を行っていくには、その土台、足場となる地元地域にしっかりと根を張ることが必要である。したがって、自分たちが生活している地元の様子を知ることが、キャリア学習の第一歩でなければならないだろう。地元地域を知ることとは、まずその来歴、歩みを知ることである。そして現在の地元地域を支えて

いる産業や生活形態、環境の実態を確認し、さらにその上で今後の地域のあり方を展望するということになるだろう。そこで本活動では「白井のルーツを探る」「現在までの白井を知る」「これからの白井を考える」の3つのテーマを設定し、それに応じた取材先にインタビューを行ったのである。

特に白井市は、千葉ニュータウン開発の初期から造成が進み、梨栽培がさかんである、といったこと以外にはあまり知られていない、かなり地味な地域である。ましてニュータウンの開発や梨栽培がさかんになる以前の状態などは、地域に在住している住民でさえよく分からず、またどのような史跡が現在も身近に残っているのかといったこともそれほど知られていないのが実際である。そして現在の状況についても、たとえば梨の栽培農家がどのようなスケジュールで栽培し、どのような工夫しているのか、さらにはニュータウンが現在の課題を通して今後どのようにあるべきか、といった内容についても機会がなければそれほど関心を持たれないであろう。こうした内容について、中学生の取材によって掘り起こしたり問題を投げかけたりすることにより、取材した当事者である生徒が地元意識を持つのはもちろん、この純粋な活動が「ちいき新聞」に掲載されることによって、読者である住民も地元に対する意識を高めていくことになるであろう。さらに「白井のルーツを探る」編では地域のお年寄りを主な取材対象にし、記事にもその方のお名前を大きく掲載するようにした。このことにより、高齢社会に向けて昔をよく知る語り部としてのお年寄りの存在をクローズアップしていくことにもなるのである。

第三に能動的なキャリア教育として地域にも影響を与えることができるということである。冒頭で述べた通り現在のキャリア教育は就業、就職支援が中心であり、つまりは現状の社会情勢にどうマッチングしていくかという受動的な位置づけとなっている。その点、本活動では生徒が地域に対して取材を行い、ケースによっては一般にはあまり知られていないようなことまで明らかになり「ちいき新聞」に掲載するという幅広い活動を行うことができた<sup>8</sup>。こうした活動の積み重ねが地域を活性化させるのは間違いないであろう。

このように埋もれているものも含め様々な地域資源を発掘し、それについて取材して結果を広く公表するという方法は必然的に地域の関係機関や住民を巻き込むことになり、実践例で示したように幅広いキャリア教育活動が展開されることになる。身近な社会の存続にさほど危機感を抱いていない地域においても、地元への関心を高めるという穏当な目的を第一にすれば比較的容易に取り組めるものであろう。

#### 4. 終わりに

以上、キャリア教育においてライフキャリアの視点から地域資源を活用していくことの必要性を、それが地域社会が存続していく上での重要な要素となるものであり、地域や地域資源の存在が長い進化の過程の結果、本能として人間に身につけているものであるという二点から示した。そして平素は埋もれている地域資源を地域情報紙の記者の立場として中学生が取材することによって発掘し、広くその存在を公表するという実践例を紹介した。

上述したようにキャリア教育は学校卒業後は職、仕事それぞれが自立した存在として当然のごとく待ち構えているという前提で展開されている。もちろんこのことは一面の事実でありキャリア教育のその方向も基本的には妥当なものであるといえるだろう。しかし仕事というも

のが人間の实生活から乖離し生活感のないものとなってしまっただけは問題である。本来はあくまでも人々が生活する息遣いの中で存在するものであるはずだ。そこが曖昧になると仕事が歯車の一つのように感じられたり、金銭を得ることのみに特化してしまったりすることになるのである。地域資源を生かし、地域の人々を巻き込んで活性化していくことが仕事の意義であるということが社会に徹底すれば、仮に労働環境が悪化してもそれに立ち向かっていく態度が身についていくのではないだろうか。こうした姿勢が高齢化とともに人口が減少していくこれからの日本を支えていくことになるだろう。そしてその態度の基盤を養うのが地域資源を活用したキャリア教育ということになるのである。

本稿では先行研究も含め、いくつかの実践例を取り上げたが、筆者が携わった白井市立南山中学校での実践例の内容は、どこの地域、学校でも実施可能なものである。実践により多くの成果が得られることになるので、同様の実践が幅広く行われるよう期待するものである。

## 註

- 1 ただし地域に事業所が存在すればそれは一般的な意味で十分地域資源といえるであろう。また地域にたまたま存在する事業所というのが全国どこでも同じというわけではなく、当然地域色が色濃く反映したものも存在するは事実であり、その意味では地域独自の資源と連携しているというケースも少なからずあるだろう。だが独自性のない必要最低限のインフラ的地域資源だけでは地域社会の存続や発展は見込めないだろうし、また独自色のある事業所での体験も見られるにしても総じて見れば小売やサービス業等の一般的な職業を体験させる実践がほとんどであろう。
- 2 ホモ・サピエンスを含めた我々の祖先の生業は狩猟採集であり、男性（雄）が主に狩猟を女性が主に採集を担当していた（長谷川・長谷川，2000）。
- 3 「脳はその所有者を、祖先が繁殖できた状況に似た状況に置こうとがんばる。（中略）ホモサピエンスに組み込まれた目標（の）（中略）リストの上位にあるのは、環境を理解すること、他者との協同を確かにすることである」（ピンカー，2003）
- 4 現在は総発行部数 240 万部である。
- 5 生徒に事後アンケートを 4 件法で実施したところ「今回の取材や記事の制作は充実していた」の質問については、「大いにそう思う」「どちらかといえばそう思う」が合計 92%、「あまりそう思わない」が 8%、「まったくそう思わない」が 0% であった。
- 6 上記註と同じく「今回の取材や記事の制作で自分の力を伸ばすことができた」に対しては、「大いにそう思う」「どちらかといえばそう思う」が 90%、「あまりそう思わない」が 10%、「まったくそう思わない」が 0% であった。
- 7 事後アンケートの「「ちいき新聞」に記事が掲載されて、これからの学校の活動に自信がついた」には「大いにそう思う」「どちらかといえばそう思う」が合計 60% であった。また「「ちいき新聞」に記事が掲載されて、将来の仕事をしっかりできると思う」の質問に対しては、「大いにそう思う」が 18%、「どちらかといえばそう思う」47% であったのに対し、「あまりそう思わない」が 28%、「まったくそう思わない」が 7% であった。この結果を「大いにそう思う」「どちらかといえばそう思う」65%、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」35% として 1 変数の  $\chi^2$  検定を行ったところ有意であった ( $\chi^2=9.515, df=1, p<.01$ )。
- 8 たとえば環境課への取材では、たまたまニュータウン開発から免れた谷田地区には全国的にも貴重な自然が残っており、その保全へ向けて動き出している。また南山中に隣接する法目地区を流れる法目川の源流は現在の白井駅の付近であった等である。

## 文献

馬場たまき（2014）過疎地域における学校統廃合後の学習支援に関する研究 ―鱈ヶ沢町の「ふるさと学習」の調査を通して― 尚絅学院大学紀要 68, 1-11.



- Bandura, A. & Adams, N. E. (1977) Analysis of Self-Efficacy Theory of Behavioral Change *Cognitive Therapy and Research*. **1**, 287-310.
- Bandura, A. (1982) Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*. **37**, 122-147.
- バンデューラ, A. 本明 寛監訳 野口京子訳 (1997) 『激動社会の中の自己効力』 金子書房
- 長谷川寿一・長谷川眞理子 『進化と人間行動』 東京大学出版会 p.116.
- 川崎智恵 (2005) キャリア教育実践に貢献できる教師教育の課題 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 **14**, 75-81
- 小宅優美・小山田健太 (2016) 地域の特性を活かしたキャリア教育の可能性 - 岩手県気仙郡住田町における森林環境学習を事例に - 筑波大学 キャリア教育学研究 **1**, 13-23.
- 高淵直哉・三村隆男 (2007) 地域学習をとおして地域に愛着を深めるキャリア教育の実践 進路指導 **80(8)**, 37-40.
- ピンカー, S. 椋田直子訳 (2003) 『心の仕組み (中)』 NHK 出版 p.241.
- ウィルソン, E. O. 小林由香利訳 (2016) 『ヒトはどこまで進化するのか』 亜紀書房 p.144.